閑素一家言

ヲ 9
1338
16

門多9
號1338
巻16

京都帝國大學圖書

聞書一家言

世にしる水と味しるる人あり　それの川　それの井
それの洞　それの岩間　のみたい味いてのみたいと
あかくさとあるをとめ　ひとりいるよりやうるきし
つきられるりり　世よ香を少知ることを学ん
人あり　伽羅羅國　真奈伽　真名塩　とこしえ
てとこしあるめとこしてめとこしある

いとたふとみるめつらおのくをちかき心ちあり人はさて
今こゝにてもあるれをおぼめき柳香は清らかなる
つゝるはけうきうてゐるまいまるやうるゐ
さすがうちうつるてゐるはうすがあるおもむき
あるとのるれい誰ふれをのてさんかれのてはは
名ゐるきゝをのせちふらむきれ把かくをれ七ツ
諸の琴をふるもいるきはゐのるる刈渡の
ゐるるあゝ廬山のるきゝ必へ月花のをりく

いつまゐ香をたるさりるれいのるて人のいるの炷
ゐるれ少ゐるをへれうのゐるひれ心をひて
を把まるおのれをゐり韋蘇州の癖あて今
つゝ歌をみるしするついてをるふれてる
佐けるるに一炷をきてまるをるこを
ある人のえてすめてゐまへて何れのゐをき
れをの家はずるるの泊るつまてゐをるまへれ
きこ香をのつることをるゐさるい京の幹吾基る

よ名つきおくて十種香をいへるうるはしき
学問にそなへおのれらちあていへるおのの
つとめはちていてさるるをいと学問得べき
ものにえるとてのくはしきてのらいあるよ
いるまてのことをかておのの香をいるるはさるたくい
るあるたくの黄山寺の一炷烟中得意九衢塵裏
倫閑といるたくいて足るといて名つきおくるて
というけかいさるまおのよ十種香のるいのるて

人の香を品さるるをいるる事ものくらはかたはるる
事をいるるるる事ものるる人の香を品さるるをよ
いおの沈のうちるも幽閑るるの恬雅るるの温潤
るるるの隹羅るるの蘊藉るるの高尚るるのあり
といて其品をえるいる其薫を盡せるるのるる
おもきい学問てしるるのあるるるの品倍おのの
さるるやおのれ人の香を炷を少て隹羅る白い
ををおいているる香をる其人るるい真奈伽るる

らん又一種を少て高尚なるまたいとおもしろいなる
と同じい伽羅なりと答おのれ伽羅真奈伽はいなる
まれいとなるとなるなるなるまれいと
けるきあちこちあけちあるるは少えてうるけちあ
の大きをたる少たるは出處まてい言たもあり
るんをしまて知りるも水と味はるたるはや
あるんかおい定りてまて十種香なるのもるのみ
て少をるもの幽閑恬雅住麗高尚なるのこるを

を大きなたるてあるをるはあるをもあり
をいおのつるをのをてをのおもきをりてあるの
をてるるなきもるきなるこはおのの香を少の
一家言まて人をるしるもあるもまてるるを人
しちなる人を語へまもあるを語をて痴人説
夢のなるへるるるまてをるの十種香のたるいをる
をふれていを與あるをのるれと唯きをを年のをの
るきるれいおのつる風雅の趣後しされいおのの詩つる

歌よみもつらねて吟詠のなぐさ
みとなすべき式をまうけて風月の楽しせうそのいとま
ありといへど辛卯の秋真正寺に遊びて詩つくり歌
よみなどせしをりから山とおもへる人乃
つくりつかへし軸乃賛をそなへしをそこの韻字
の次第を三さき乃香の次第として炷試み次なる韻字
をかりてあらたに三種をきめ韻を和してのうへ作
りて少をなべたり其をりの人とい寺社伽月将京の
紫野大徳寺社首座宗雄おのををへ子文行をこの
もりてはをりの文行の韻字を上の句の句をの
ちめるおきて歌よみて香をとりくゆあてたり
こいおのの書る焚香記といふる文をかりいへる又
いつの春まあらん友をちの家にて茶の湯しを
をり茶の湯をて例の香ゆりり其をりに東風
をいをを題して香二種ゆりり一を東をり二を風をて
炷をりをり次に例の韻字をかりて以題為韻東字風字同韻ゆり

あるいは五言六言の絶句作りて少き多くあり
歌は東風をかけてこちらとして上の句のもの名と
下の句のもの名とをおきてよむこい古今集のもを
ちめるをもてとある僧正遍照の歌の例多くあり
あるこの名はいるかに教へあり歌にて香を少しい
おのれをめたるあるは鴨猪鳥ぬそいちはやぶるかみ
をるへ〜ぶるその自者の汎称 竹田翁の家は花も
磯 球 爲香 題 折句にて少なるあり詩にて少

しをもて名はおのれをおきてをさへあるべしも
おのえにさてかくをもて作法はいるをもてなる
こはをこうあるのすみあれは者流は分別虚説
よるまたうをもて有はまの世て取合とのも
へきてをもてをさをして定て求つる作法はあれは
人もうへるりあるをもてあれはさをは定しる十種香
るの作法もすへるれをあるの香炉 七つ具
中くるをくしうの形ねをいる

しるべきなり心地をむすぶの人のかたちの乃
をしるべきてをきてこれをしるべきなり
作法もまたおなじ者流家ごとに殊なりいめて
まうする香の茶の湯に付て作法を出あて
使ふべきを中より紅香の茶とまたの彼十種香
ををきたるものをもてうつわの内合灰のなか
をへて炭のこしやうかをもちゐるふれてをみり
とのをもたるなり其式はさてやのがら香盒を

爐瓶盒の三ツを並て火取ををへいるのをもあれ
ら此焚香七要をもいふもあるいてををき
作法をもいるものをいさるも古人の用る
事にあらねされこれをいまの茶の湯に付る時乃
式をもいるかをもをもをもしる彼十種香の名をし
古式は是儲をて今のををまあるををまて
古式の紅香をもの始てを対の香炉折居を
用る事はるをしおもむき香家者流の書しるし

五つ今の地鋪り對の香爐折居のたくし
きて後よりもうつくしとなりて古式の
平餅よりてこれい今の地鋪餅のこゝめ〳〵
くしきものあて中くるうハしき
作法なり且香盆の外る乱箱とり用ふてあるき
なりそくく捨ますこれい古式平餅をも
るよまへなりておのゝ一家の香式なるる
ゆかりなりてあるこれ香のふうら考へる中よ

古来よりあるい来るる香合炷合ふとゆ
抑香合歌合のうあいすりいてるの式殊よおかとう
よもおかるすきしるる又炷合ふいや後の
連歌ふそるの式い大ふ茶提おるく香合ふい
すてこ庵やた後原ふして極ふく品数ナく
して相今童く且香爐ふるめて きへて好く
ようなる取合て用ふい活用(ハタラキ)あて物ふく
ふるふて客ふうれとそんとをいあふふとの

まてふきまあて出されて大てい茶抹ようちて灰
のなかにたてうりまきものの時香をたしむ者
いられての作法をこそ者よそ中ハ世茶抹
を好む人い多く香弐を好む人いかしいそこふる
茶抹ハ十種香のきこひのく
まて知むき淺れいかく十種香のたくひ茶
歌舞妓ふとのいとうて茶ハ茶歌舞
妓やうのものくるうい誰ハいれをいハさらん

香ハ炷合ものの式世ハ流布して人のおもむき
あるてを志ハ誰ハられをめてさらん志者
流家いられを祕して つへ其の者ハまく
其奥をさらんもおもいらん唯世ハ
あるよ十種香のたくひを香のかいのく
四えてらいくちをて志て炷合ハ心をハ連歌
のをきてをまるハ路を絶を附合ハ孤ハ
炷くを揚香ハ或系附 古事附 折紙

去嫁季なるを季なるを或は生物植物降物の
多くは七種なるを去は七句去のことなり殺るを
炷くを揚香といふは揚句のことなり多年亦
茅者折るを五種七種あり冷して一度へ少
すつれて皆連歌の式をうけたるものかく
おこなはれたるを伝へあるを
あれはうつりき作法はあるを初り試ける人
もあり偶つくをうけたる人もおのれたるの人

稀なれは生涯十種香の事をしるすをあぬ
分ていをもむへきをもむへきをあるを
をもむのあまるのをもらはらの式を主張して
香の茶社陽よるをもらへ香の歌の會をふをを
つくりて和歌抹茶衆議歌合の新式を企む
式の次第略ぬまて
を香合を六番よりへ炷合を六種よりて
つよる其式をるりて

筑波山の蔭ゝよりていとゝ磯城島乃
道をあつのうんとるゝ

天保九年戊戌の秋仲下一炷の
香を炷てこれをしるす

萬竹院
藏書印